

序 文

本書は、平成 26 年度に都城市立繩瀬小学校屋体建設に伴って発掘調査を実施した繩瀬横尾第 3 遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。発掘調査では、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての集落の一部と考えられる遺構・遺物が見つかりました。調査区の周辺では、古墳時代中期から後期にかけて造営されたとみられる横尾地下式横穴墓群が見つかっています。今回の調査から、これらの墓域が形成される前の様相が、部分的ながらも明らかとなりました。

これら先人の残した文化財を守り引き継いでいくことは、私たち都城市民の責務でもあります。本書を通して、こうした地域の歴史、文化財に対する理解と認識がますます深まる事を願いますとともに、調査で明らかとなった成果が今後の学術研究発展に少しでも寄与できれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで御協力いただいた市民の皆様、関係各機関に心から感謝申し上げます。

2016 年 3 月

都城市教育委員会
教育長 黒木哲徳

例 言

1. 本書は都城市立繩瀬小学校屋体建設に伴い、発掘調査した繩瀬横尾第 3 遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都城市教育委員会が主体となって、同文化財課主査加賀淳一が担当した。
3. 調査着手まで、本遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地「横尾地下式横穴墓群（TZ - N012）」として、墓域単独の名称登録がなされていた。今回の発掘調査で新たに弥生時代から古墳時代にかけての集落が見つかったこと等から、調査終了後、平成 27 年 4 月 1 日に「繩瀬横尾第 3 遺跡」として名称を変更登録している。
4. 本書に使用したレベル数値は海拔絶対高で、基準方位は座標北（G.N）である。使用した座標数値は国土座標（世界測地系）に基づいている。
5. 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真的番号は一致する。
6. 土層と遺物の色調は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
7. 現場における遺構の実測は作業員の協力を得て加賀が中心となってこれを行ない、文化財課主幹栗畠光博、同主事中岡剛史の協力を得た。
8. 遺構の写真撮影は加賀が行なった。
9. 本書に掲載した遺構のトレースは株式会社 CUBIC の「トレースくん」並びに Adobe「Illustrator CS5」を用いて加賀が行なった。遺物の実測・トレースは整理作業員の協力を得て加賀、文化財課嘱託玉谷聰美（現八代市教育委員会）が行なった。
10. 本書に掲載した遺物の写真撮影は加賀が行なった。
11. 本書の執筆・編集は加賀が行なった。
12. 本遺跡から出土した土器の圧痕調査について、鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 中村直子教授より玉稿を賜った。
13. 本書中における遺構略記号についてはそれぞれ、竪穴建物 = 「SA」、土坑 = 「SC」とし、検出順に通し番号を付している。
14. 発掘調査で出土した遺物と全ての記録（図面・写真など）は都城市教育委員会で保管している。

目 次

本文目次

第1章 序	1	2) 土坑 (SC)	11
第1節 発掘調査に至る経緯	1	3) 包含層出土遺物	13
第2節 調査の組織	1	i 土器	13
第2章 遺跡の位置と環境	2	ii 土製品	13
第1節 地理的環境	2	iii 石器	13
第2節 歴史的環境	2	第4節 縄文時代の遺物	15
第3章 調査の成果	5	第4章 総括	17
第1節 発掘調査の方法と概要	5	写真図版	18
第2節 縄瀬横尾第3遺跡の基本層序	6	付編 縄瀬横尾第3遺跡出土土器の圧痕調査報告	21
第3節 弥生時代・古墳時代の成果	7	付編 都城市立縄瀬小学校収蔵考古資料について	23
1) 堪穴建物跡 (SA)	7	報告書抄録・奥付	26

挿図目次

第1図 縄瀬横尾第3遺跡と周辺の遺跡 (1/50,000)	3	第9図 SA2実測図(1/40)	10
第2図 調査地点位置図(1/10,000)	3	第10図 SA2出土遺物(1/3)	11
第3図 縄瀬横尾第3遺跡トレンチ配置図確認トレンチ 土層断面図(1/500・1/60)	5	第11図 SC1・SC2実測図(1/40)	12
第4図 縄瀬横尾第3遺跡遺構配置図(1/80)	6	第12図 土坑出土遺物(1/3)	12
第5図 縄瀬横尾第3遺跡土層模式図	7	第13図 包含層出土遺物(1/2・1/3)	14
第6図 SA1実測図(1/40)	8	第14図 包含層出土遺物②(1/2・1/3)	15
第7図 SA1出土遺物(1/3)	9	第15図 縄文時代の遺物(1/1)	15
第8図 SA1出土遺物②(1/3)	10	第16図 縄瀬横尾第3遺跡出土土器の圧痕	22
		第17図 都城市立縄瀬小学校収蔵資料実測図(1/3)	25

挿表目次

第1表 縄瀬横尾第3遺跡出土土器観察表	16	第4表 縄瀬横尾第3遺跡出土土器と圧痕属性	22
第2表 縄瀬横尾第3遺跡出土土製品観察表	16	第5表 都城市立縄瀬小学校収蔵資料観察表	24
第3表 縄瀬横尾第3遺跡出土石器観察表	16		

写真図版目次

写真図版1	18	写真図版3	20
写真図版2	19		

第1章 序

第1節 発掘調査に至る経緯

平成25年7月10日、都城市教育総務課より都城市高崎町繩瀬1411-1に所在する、都城市立繩瀬小学校内工事に係る文化財所在の有無について照会がなされた。これによると、工事の内容は体育館屋体の新築工事であり、現在の体育館を解体した後、近接箇所へ新屋体を建設する計画が提示されていた。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「横尾地下式横穴墓群(TZ-N012)」に位置していたことから、これを受けて文化財課は事前確認調査を実施することとなった。

横尾地下式横穴墓群では、これまでにも学校敷地内において、古墳時代の地下式横穴墓が複数基調査されており、墓群が形成されていることが明らかとなっている(注1)。このことから、文化財課では工事予定箇所内でも地下式横穴墓が残存している可能性を考慮し、宮崎県教育委員会の指導・協力の下、地下レーダー探査を平成25年10月31日～11月1日に実施した。このレーダー探査の結果からは、対象地点内において地下式横穴墓と思われる反応は見られなかった。

その後、平成25年12月3日～4日にかけて確認調査を実施した。確認調査トレンチは合計6ヶ所設定し(1～6tr)、これらを人力にて掘下げて地下の状況を確認した。この結果、調査地点の西側にある直径20m程度の築山に設定した5trの表土下の黒色土から、弥生時代から古墳時代にかけての土器が多量に出土した。また、堅穴建物と思われる遺構も検出されたことから、当該期の遺跡が残っていることが明らかとなった。また、築山の周辺は大きく削平されていることもわかり、築山を除いた範囲には遺跡が残存していないことが明らかとなった。この結果をもとに、文化財課は教育総務課と遺跡の取扱いについて協議を重ねた。この結果、遺跡の残存する築山部分に関しては、本発掘調査による記録保存を行なうことで合意した。その後、平成26年3月17日には、都城市から文化財保護法94条第1項に基づいて発掘通知が提出された。

現場における発掘調査は、平成26年4月下旬に築山部分の樹木を伐採し、5月1日から着手した。調査は諸作業を経て、5月26日に終了した(実調査日数15日間)。発掘調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての堅穴建物跡2棟、古墳時代に該当すると思われる土坑2基が検出されたほか、遺物も土器、石器が出土した。

発掘調査終了後にこれらの結果について、宮崎県教育委員会へ報告した。今回の調査では、新たに集落跡が見つかったことから、従来の「横尾地下式横穴墓群」の名称を継続して使用することは、今後、周知の埋蔵文化財包蔵地の取扱いの中で運用上の支障をきたすものと考えられた。そこで、周辺における周知の埋蔵文化財包蔵地とも調整を図り、平成27年4月1日付けで新たに「繩瀬横尾第3遺跡」として名称を変更登録することになった。また、遺跡の内容も「古墳」として単独登録されていたものに、新たに「集落」を追加登録することになった。

平成26年度は上記のような作業を経て、翌平成27年度には報告書作成事業を実施した。

平成27年度の報告書作成作業は、出土遺物のピックアップを行なった後、遺物実測図の作図を行なった。実測図化した遺物は、約50点を数える。実測図を作成し終えた遺物は順次トレースによる製図を行なった。トレースはロットリングによる紙トレースによって作成した。この遺物トレースと併行しながら遺構図の製図・トレースも行なった。遺構図製図はトレースソフトを使用したデジタルトレースによるものである。

トレース終了後に各図等のレイアウト、文章執筆、遺物写真撮影を経て報告書製本・刊行へと至った。

(注釈)

- 1 石川恒太郎 1972「高崎町大字繩瀬字横尾地下式古墳調査報告」「宮崎県文化財調査報告書」(16) 宮崎県教育委員会
石川恒太郎 1972「高崎町繩瀬小学校校庭の地下式古墳調査報告」「宮崎県文化財調査報告書」(16) 宮崎県教育委員会

第2節 調査の組織

平成26年度 発掘調査

- ・ 調査主体者 宮崎県都城市教育委員会
- ・ 調査事務局 教育長 黒木哲徳
教育部長 児玉貞雄

文化財課長	新宮 高弘
文化財課副課長	松下 述之
文化財課主幹	桑畠 光博
・ 調査担当	文化財課主査 加賀 淳一

平成 27 年度 報告書作成

・ 調査主体者	宮崎県都城市教育委員会
・ 調査事務局	教 育 長 黒木 哲徳 教 育 部 長 児玉 貞雄 文化財課長 新宮 高弘 文化財課副課長 武田 浩明 文化財課主幹 桑畠 光博
・ 報告書作成担当	文化財課主査 加賀 淳一

発掘作業従事者

前口芳子 池田健一 三田慶子 関福一

整理作業従事者

横尾恵美子 水光弘子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第1図・第2図）

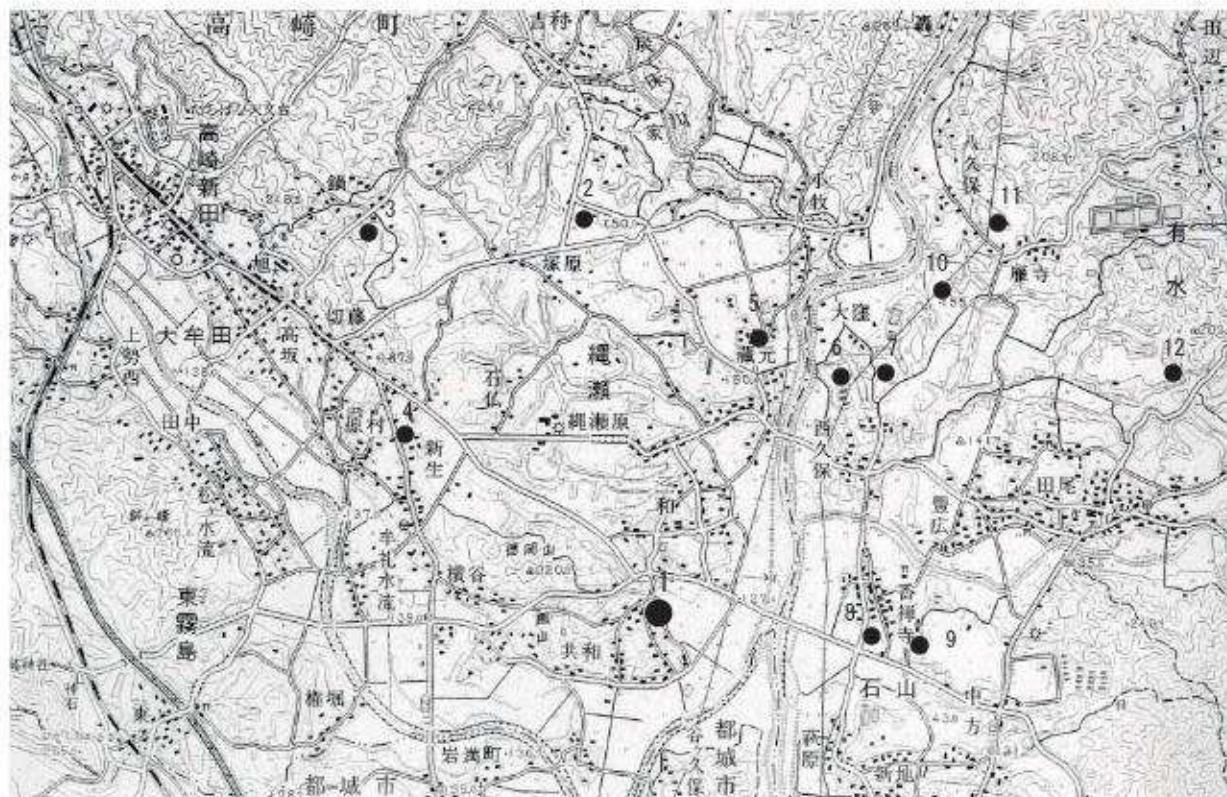
縄瀬横尾第3遺跡（横尾地下式横穴墓群）の位置する都城市高崎町は、市の北縁部に位置しており、行政区分的には小林市及び西諸県郡高原町と隣接する地域にある。大淀川を挟み対岸は都城市高城町となる。高崎町域は大牟田、前田、縄瀬、江平、東霧島、笛水の5地区に分かれている。縄瀬横尾第3遺跡は縄瀬地区に所在する都城市立縄瀬小学校敷地内に位置している。この地点は都城盆地中央を北流する大淀川の左岸にあり、ちょうど西から流れ込む高崎川との合流部付近にもある。調査地点の北東約1kmには大淀川と東流する有水川との合流地点が位置している。

遺跡は大淀川左岸のシラス台地縁辺付近に位置している。台地の西側には山地が広がっており、標高約220mの徳岡山などがある。また、台地の北側には侵食谷が入り組んでおり、西側へと延びている。現在では、この谷頭からの湧水を利用して水田となっている。また、台地下の段丘面にも氾濫源が広がっており、現在は大半が水田となっている。調査地点の標高は約145mであり、下位の段丘面（氾濫原）との比高は10m程度ある。学校建設に伴って調査地点付近の地形は著しく改変されているようであるが、周辺の状況からは、本来は東側の台地縁辺に向かって緩やかに傾斜していたことがわかる。現在では学校の周辺には住宅が散在しており、宅地化が進行している場所も見られる。

第2節 歴史的環境（第1図）

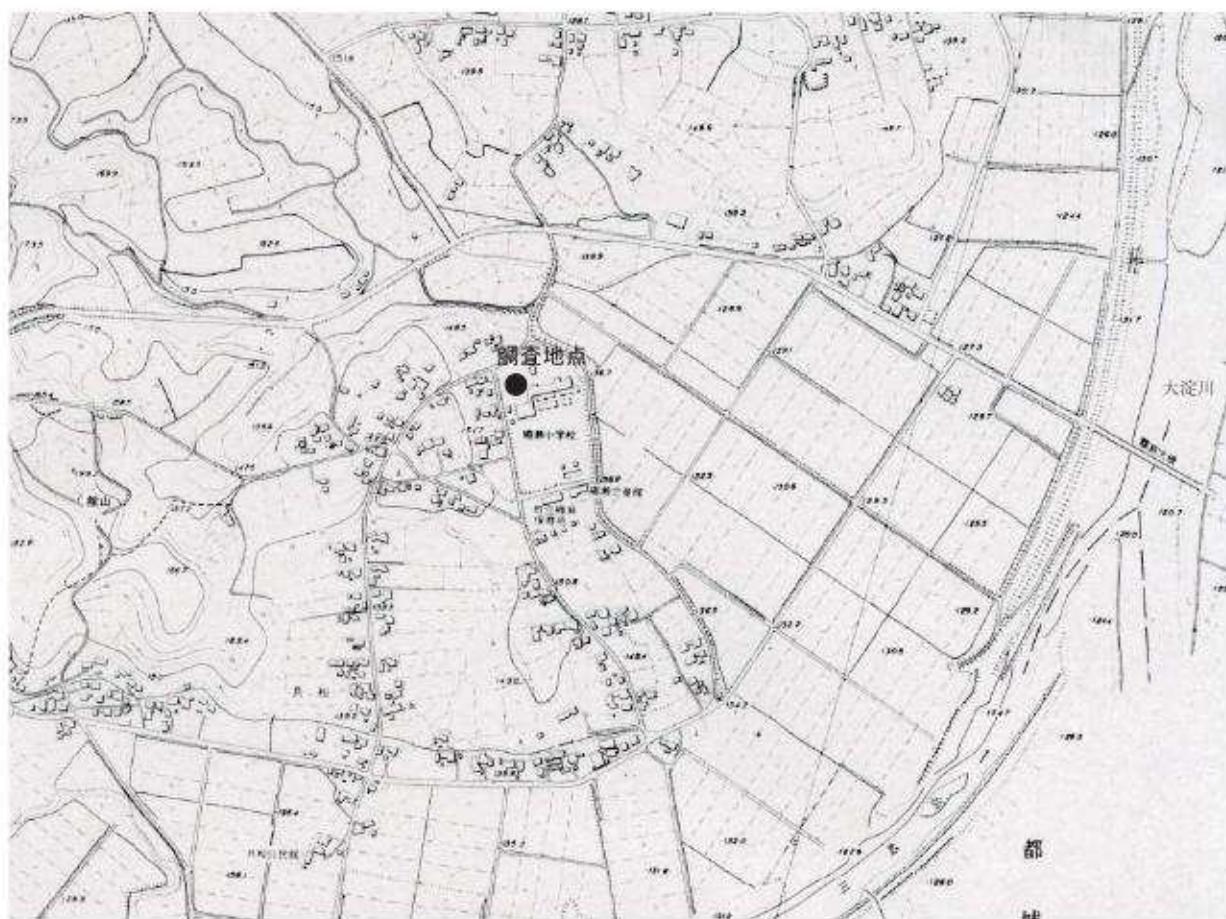
旧石器時代～縄文時代

高崎町域内では、後期旧石器時代の発掘調査事例はないが、笛水地区に所在する平松遺跡（笛水小中学校よりも北東100mの地点）では、平成24年に携帯電話鉄塔建設に伴って確認調査した結果、霧島小林軽石層の直上から石器剥片が出土しており、当該期遺跡の存在している可能性が高いことが明らかとなっている。これ以外に旧石器時代の遺跡に該当する調査事例はない。



1: 繩瀬横尾第3遺跡（横尾地下式横穴墓群） 2: 高崎塚原古墳群 3: 磯前遺跡 4: 原村上地下式横穴墓群 5: 御の塚 6: 下ノ塚 7: 横田木塚 8: 菅原寺地下式板石積石棺墓
9: 高取原地下式横穴墓 10: 上原遺跡群 11: 山城第1遺跡 12: 高八重遺跡

第1図 繩瀬横尾第3遺跡と周辺の遺跡 S=1/50,000



第2図 調査地点位置図 S=1/10,000

縄文時代の調査事例は増えてきており、わずかながら様相が明らかとなりつつある。都城市立笛水小中学校体育館建設に伴って発掘調査を実施した平松遺跡では平桟式～塞ノ神式期の集落跡が見つかっている。埋設土器や当該期の竪穴状遺構が検出されたほか、土器や石器も多数出土している。

また、海蔵寺遺跡では縄文時代後期の竪穴建物のほかに多数の土器が見つかっている。このほかに北迫遺跡でも、縄文時代後期の竪穴建物が検出されており、集落と考えられる。住居内から指宿式土器が出土している。

弥生時代～古墳時代

前田地区に所在する様屋敷遺跡では、弥生時代前期の土器が出土している。九州縦貫自動車道建設に伴って発掘調査された今村遺跡では弥生時代前期～中期初頭にかけての土器が出土している。また、朴木遺跡では弥生時代中期の石蓋土坑墓が計11基確認されており、当地域では稀少な墓域が見つかっている。このほか、上示野原遺跡では弥生時代後期から古墳時代にかけての集落が見つかっている。

鍋前第3遺跡・鍋前第5遺跡では古墳時代の集落が見つかっている。これ以外にも栗巣上原遺跡でも古墳時代中期の土器が見つかることから集落跡と考えられる。このように除々にではあるものの、当地域における弥生時代～古墳時代にかけての集落は明らかとなりつつある。

高崎町域では古墳群も複数存在しており、マウンドを持つものとして高崎塚原古墳群がある。前方後円墳である1号墳のほか、(消滅したものを加えると)約30基の高塚墳で形成されている。造営されている古墳の中には、当地域ではあまり見られない方墳もかつて存在したとされている。このほかに高崎町域では、古墳時代の地下式横穴墓群として仮屋尾(日守)地下式横穴墓群、原村上地下式横穴墓群などの存在が知られている。今回発掘調査を実施した繩瀬小学校内及びその周辺には横尾地下式横穴墓群が展開しており、これまで玄室陥没等に伴って、少なくとも6基の調査がなされている。このほかにも工事中に玄室が陥没した事例が複数あったとの報告もあり、工事等によって消滅したものも複数基存在しているようである。

古代(奈良・平安時代)

奈良・平安時代の政所第2遺跡では越州窯系青磁碗が見つかっており、周辺には平安時代の集落があったことを伺わせる。

中世

高崎町域には中世城館跡も複数存在している。木場城、卯の城等の存在が知られている。様屋敷遺跡では中世の遺構・遺物が見つかっている。木場城は高崎町域では縄張り調査、発掘調査が実施された中世城館である。16世紀後葉以降の築造とされており、発掘調査の結果、南九州では稀有な畝状空堀群が検出されている。この地域では当該期の集落遺跡の調査事例はほとんどなく、様相は不明なものが多い。

近世(江戸時代以降～)

江戸時代の高崎町域は鹿児島藩の直轄領であり、前田地区には地頭仮屋が置かれ、麓集落が形成されていた。このことと関連するように麓地区に所在する様屋敷第1遺跡においては近世期のものと思われる掘立柱建物跡、陶磁器類が検出されている。

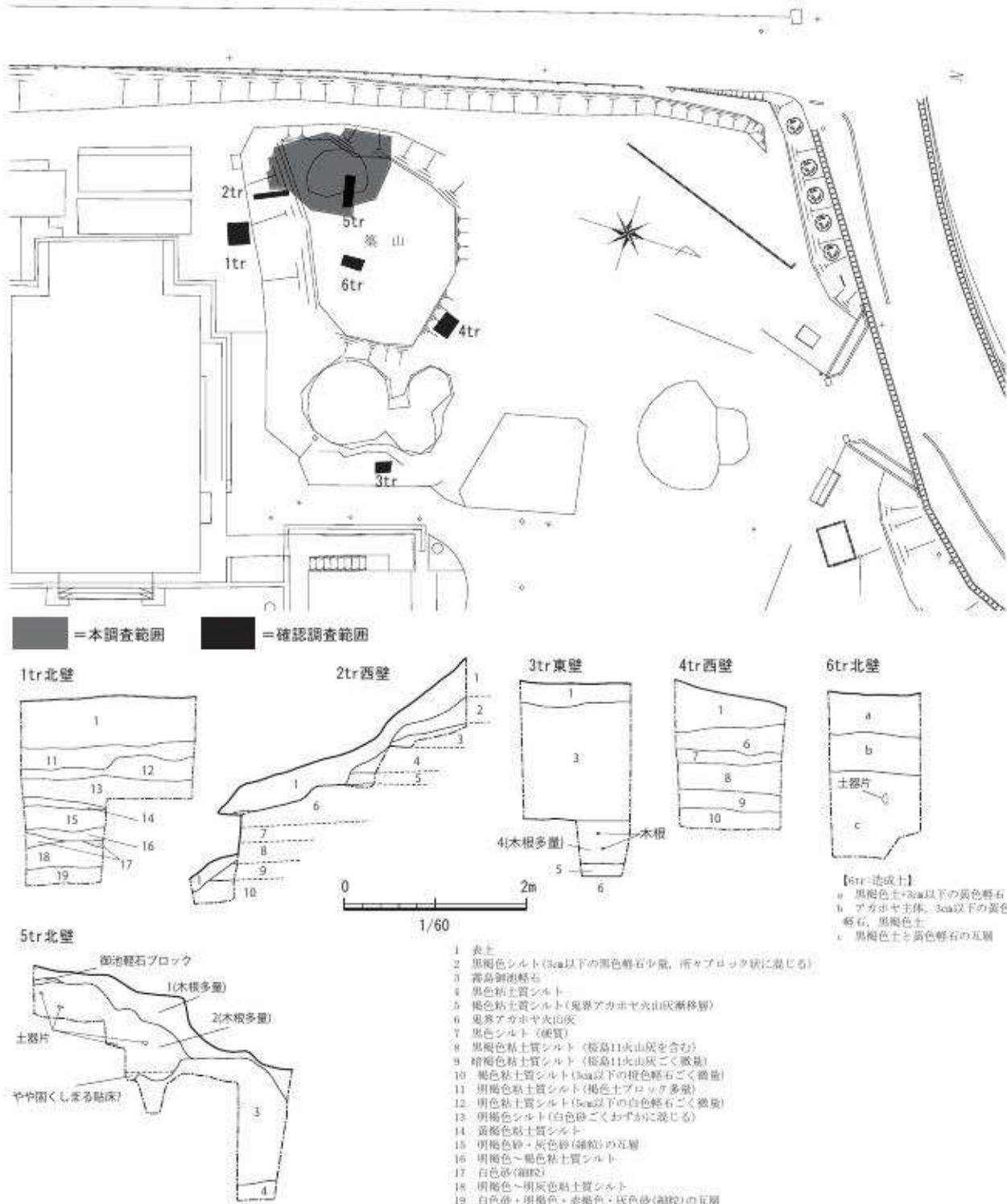
【参考文献】

- 石川恒太郎 1972「高崎町大字繩瀬字横尾地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書(16)宮崎県教育委員会
石川恒太郎 1972「高崎町繩瀬小学校々庭の地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書(16)宮崎県教育委員会
石川恒太郎 1972「高崎町炭床出土の縄文土器について」宮崎県文化財調査報告書(16)宮崎県教育委員会
都城市教育委員会 2007「鍋前第3遺跡」都城市文化財調査報告書(82)
都城市教育委員会 2013a「平松遺跡」都城市文化財調査報告書(108)
都城市教育委員会 2013b「都城市内遺跡6」都城市文化財調査報告書(110)
高崎町教育委員会 1989「原村上地下式横穴墓群 高崎町出土の古墳時代人骨」高崎町文化財調査報告書(1)
高崎町教育委員会 1990「様屋敷第1・2遺跡 木場城跡」高崎町文化財調査報告書(2)
高崎町教育委員会 1992「遺跡詳細分布調査報告書」高崎町文化財調査報告書(3)
高崎町教育委員会 1993「朴木遺跡」高崎町文化財調査報告書(4)
高崎町史編纂委員会 1992「高崎町史」高崎町
宮崎県教育委員会 1979「九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)」
宮崎県教育委員会 1983「宮崎県文化財調査報告書」(26)

第3章 調査の成果

第1節 発掘調査の方法と概要（第3図）

縄瀬横尾第3遺跡の発掘調査は、工事予定箇所の築山部分48mを対象として行なった。調査前に調査対象地



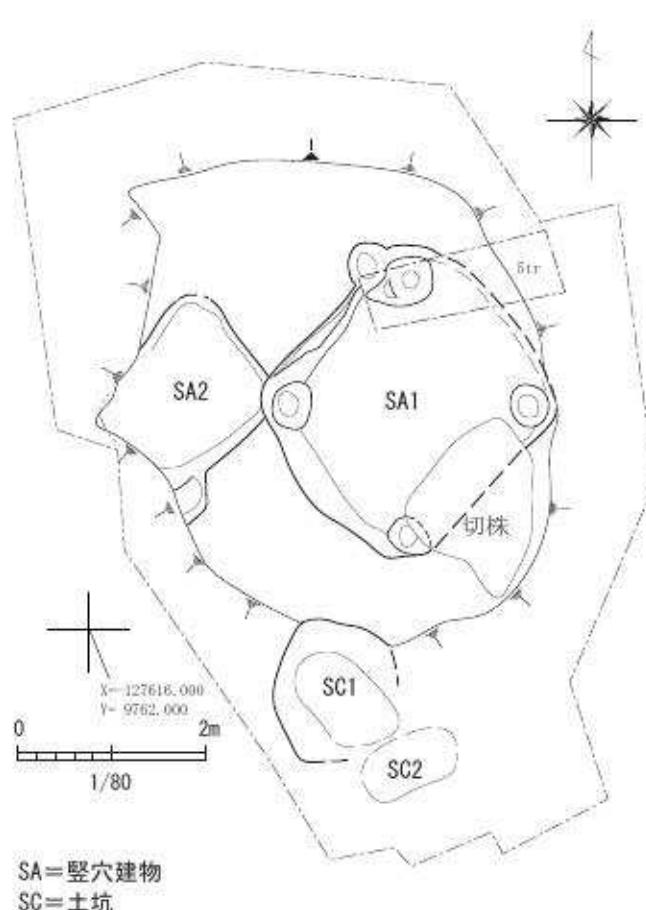
第3図 縄瀬横尾第3遺跡トレンチ配置図 確認トレンチ土層断面図 S=1/500・1/60

内には樹木が密生していたことから、まずこれらの伐採を行なった上で現場調査に移行した。調査範囲が狭小だから、グリッドによる区割りは実施していない。ただし、遺物取り上げ及び遺構測量には国土座標を使用するため、調査区の近辺に測量業者に委託して世界測地系に則った測量用基準点を設置した。

発掘調査は平成26年5月1日に着手し、まず、調査区設定後に人力で表土剥ぎを行ない、遺物包含層を露出させた。その後手鋤を使用しながら包含層の掘下げを行なった。先述したように、調査地点は大きく削平を受けていたことから、表土以下の土層堆積を確認するために調査区中央に、東西南北十字方向に土層観察ベルトを残して掘下げを行なった。包含層から出土した遺物はトータルステーションを使用し、座標位置記録後に取上げた。トータルステーションを使用して取上げた遺物は約180点を数え、指頭大以下の小片は調査区と遺構から出土したものと分けて一括にて取上げた。特に、竪穴建物SA1の上位では、遺物の出土量が多く、これらを取上げながら掘下げを行なった。調査区内にはタブの木の切株が残っており、これは人力による撤去が不可能であった。これにはSA1の一部も含まれていたが、作業の安全管理上この範囲は調査対象外とした。包含層出土土器は小片が多く、完形になるものは非常に少なかったが、遺構内外で接合するものも見られた。

遺物包含層の掘下げが終了した後、霧島御池軽石層漸移層（Ⅲ層）上面で遺構検出を行なった。この結果、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての竪穴建物2棟、土坑2基が検出された（第4図）。これらの検出遺構は土層観察ベルトを残しながら掘下げ、出土遺物は座標位置を記録し、取上げた。さらに完掘した上で写真撮影し、その後、スケール1/20を基本とする平面図を作成した。

これらの作業を完了して、平成26年5月26日に現場における発掘調査は終了した（実調査日数15日）。発掘調査で出土した遺物はコンテナケース6箱分である。



第4図 繩瀬横尾第3遺跡遺構配置図 S=1/80

第2節 繩瀬横尾第3遺跡の基本層序（第5図）

今回の調査は築山部分のみの調査である。先述したように、周囲は大きく削平されていることから、通常の土層堆積状況を呈していなかった。よってここでは、確認できた基本土層について、事前に行なった確認調査結果の概要も踏まえて掲載しておく。対象地は調査直前まで樹木が植わっていた。木根が繁茂しており、生物擾乱によって、わずかながら土層の移動も見られたものの、おおまかな基本層序は以下の通りである。

I層は、黒褐色（7.5YR3/1）微砂質シルトである。表土である。調査着手前まで樹木が植わっていたこともあり、木根が繁茂している。

II層は、黒色（7.5YR2/1）シルトを基本とする粘質土層である。II層が今回の発掘調査における遺物包含層である。II層は、黄色軽石の含有具合から、2層に分離することができる。

IIa層は、黒色（7.5YR2/1）シルト 1cm以下の黄色軽石まんべんなく含む。木根が繁茂している。

IIb層は、黒色（7.5YR2/1）シルト 1cm以下の黄色軽石多く含み、御池軽石ブロック

混じる。木根が繁茂している。土層中には土器片を多く含む。

III層は、黒褐色(7.5YR3/2)シルト 2cm以下の黄色軽石を非常に多く含む IV層(霧島御池軽石層)への漸移層となる。今回の発掘調査における遺構検出面である。

IV層は、霧島御池軽石層である。粒径5cm以下の浅黄色軽石が層厚約1.5mで堆積している。下位にいくほど軽石の粒径は大きくなっている。ちなみに、これまでに調査された横尾地下式横穴墓群中の地下式横穴墓玄室はこの軽石層中に造られている。

上記の基本土層が、今回の発掘調査において確認された基本土層である。これに加えて確認調査時に設定した1trおよび2trからは、霧島御池軽石層よりも下位において、以下の層序が確認されている。

- V層 黒色粘土質シルト
VI層 褐色粘土質シルト(鬼界アカホヤ火山灰層漸移層、いわゆる「二次アカホヤ」に該当する)
VII層 鬼界アカホヤ火山灰層(K-Ah)
VIII層 黒色シルト(硬質)
IX層 黒褐色粘土質シルト(桜島11火山灰を含む)桜島11火山灰濃集層である
X層 暗褐色粘土質シルト(桜島11火山灰ごく微量含む)
XI層 褐色粘土質シルト(3cm以下の橙色軽石ごく微量含む)
XII層 明層褐色粘土質シルト(褐色土ブロック多量)
XIII層 明褐色シルト(白色砂ごくわずかに混じる)
XIV層 黄褐色粘土質シルト
XV層 明褐色砂・灰色砂(細粒)の互層
XVI層 明褐色~褐色粘土質シルト
XVII層 白色砂(細粒)
XVIII層 明褐色~明灰色粘土質シルト
XIX層 白色砂・明褐色・赤褐色・灰色砂の互層

以上のような層序で堆積している。

特に、鬼界アカホヤ火山灰層より下位の土層(VII層~XI層)は、通常、都城盆地の遺跡において縄文時代早期以前に該当する土層である。この層準からは遺構・遺物は検出されていない。

さらに、これよりもさらに下位、XIV層以下はいわゆる「2次シラス」上位に包括される土層として把握でき、これよりも下位では成層シラスが堆積しているものと考えられる。このことから、調査地点付近はシラス堆積後には河川等の影響により、水成作用による侵食が繰り返されているものと推察される。

このほか、調査地点の東側築山部に設けた6trの土層からは、この部分は造成土を主体とした盛土であることが明らかとなっている。このことから、調査地点付近では、今回調査した築山部分を中心に、著しく改変を受けている箇所も見られる。



第5図 縄瀬横尾第3遺跡土層模式図

第3節 弥生時代・古墳時代の成果

1) 壁穴建物跡(SA)

SA1(1号壁穴建物跡)(第6図・第7図・第8図)

調査区の中央部で検出された、 $2.9 \times 2.5(m)$ の略方形プランを呈する壁穴建物跡である。建物の床面積は約5.2m²を測る。遺構検出面はIII層である。遺構のすぐ西にはSA2があり、これと切合関係にある。SA1がSA2を切っており、こちらのほうが新しい。南側の立ち上がり付近にはタブの木の切株があり、人力による撤去が不可能だったため、この部分は未掘である。建物の主軸は北西~南東方向にある。壁穴内の四隅には柱穴と考えられるビッ

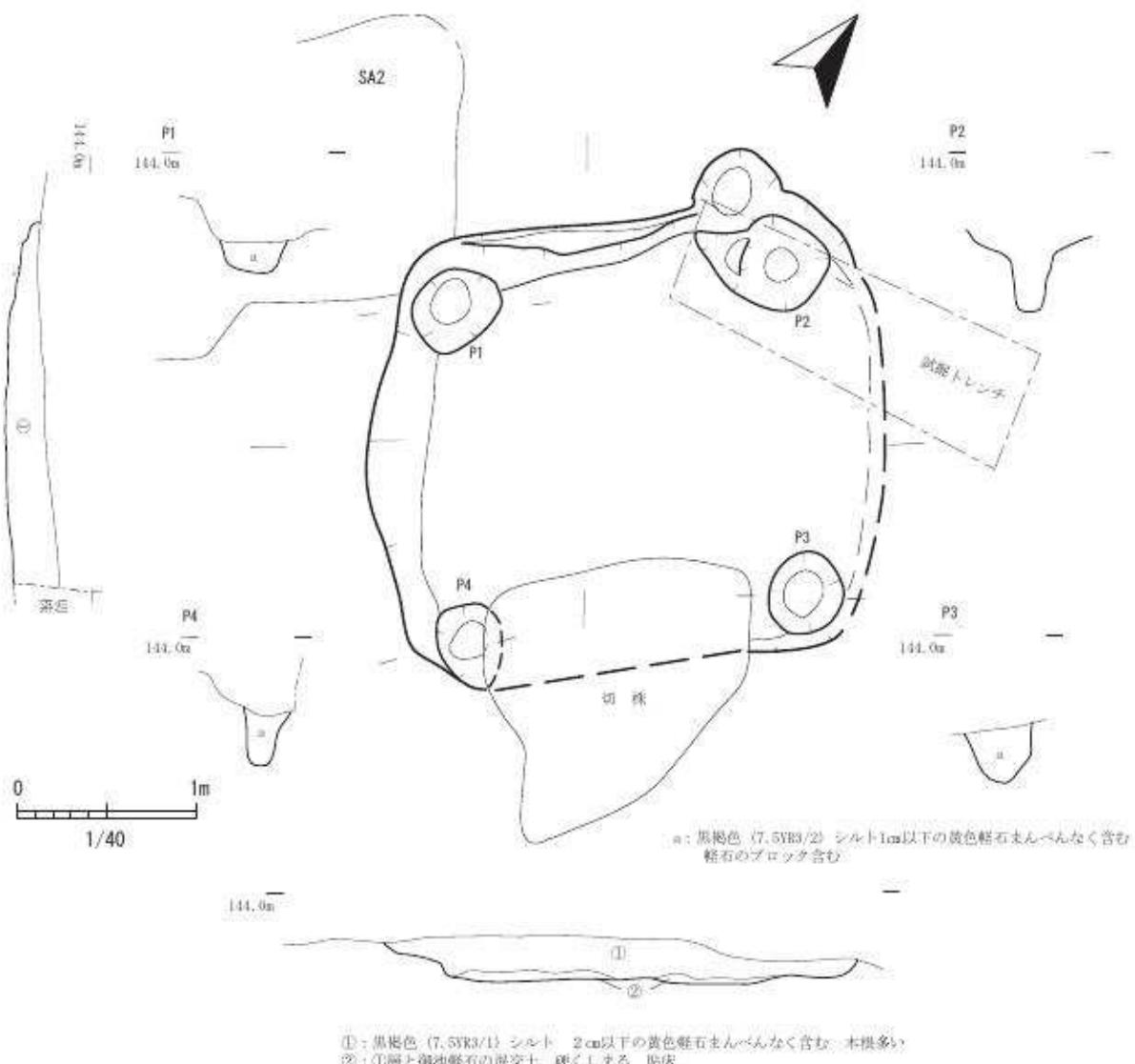
トが検出された。柱穴の深さは床面から約0.2～0.3mを測る。

遺構の断面形は、ゆるやかな立ち上がりを持ち、浅い摺鉢状となっている。遺構の深さは検出面から約0.3mを測る。埋土は御池軽石をまんべんなく含む黒褐色粘質土が堆積しており、これは凸レンズ状の堆積であったことから、自然埋没による堆積と考えられる。建物床面には黒色土と御池軽石の混層がみられることから、これは貼床を施しているものと見られる。貼床は遺構床面のほぼ全面に施されていることが確認できた。

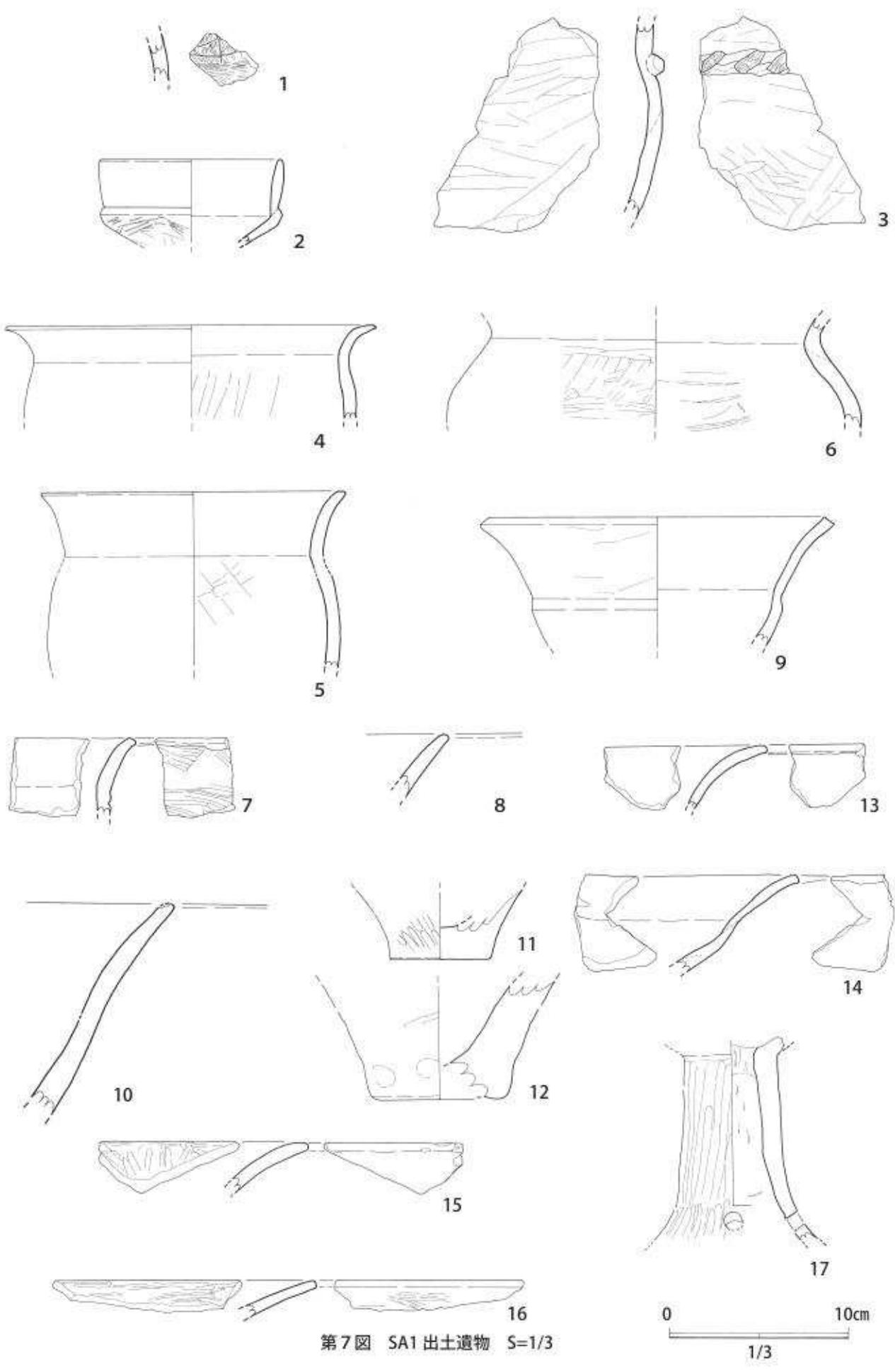
遺構内からは、土器がやまとまって出土しているほか、石器（石鎚未成品、磨石・敲石）も出土している。遺物は床面よりも上位の埋土から出土しているものが大半である。土器は遺構の中央部に集中している状況もみられた。器種には、甕、壺、高杯、小型精製器種等が見られた。これらの中でも甕が最も多く出土している。

1は壺の胴部と見られる小片である。ヘラ状工具による記号と思われる沈線文が認められる。2は小型精製鉢である。外面には工具痕が残っている。3～8は甕である。6は胴部上位が大きく膨らむ器形を呈するもので器壁が厚い。内面には工具による調整痕が明瞭に残る。9は鉢である。10は粗製の鉢の口縁部である。外面には部分的に朱が付着している。11・12は甕の底部である。13～17は高杯である。14には緩いS字状の屈曲がみられる。15・16にはいずれも内面にミガキの痕が残る。17は柱状の脚部で裾部はスカート状に開く。円形の透孔が認められる。杯部底面から明瞭に剥離していることから、円盤充填技法により製作されたものと考えられる。

これら出土土器の特徴から、SA1の年代は弥生時代終末期～古墳時代初頭に位置付けられる。



第6図 SA1実測図 S=1/40



第7図 SA1出土遺物 S=1/3

0 10cm
1/3

SA1 からは、石器も出土している。18 は磨石・敲石である。両端に敲打痕が認められる。19 は小型の磨石である。全面に磨面がみられる。20 は調整のある剥片で縁辺に剥離が認められる。石材は輝石安山岩を使用している。

SA2 (2号竪穴建物跡) (第9図・第10図)

SA1 のすぐ西で検出された小型の竪穴建物跡である。平面形は方形を呈するものと思われ、小型のプランと考えられる。西側は削平によって大きく削られているものの、残存部だけで 1.5×1.4 (m) を測る。床面積は残存箇所だけで 1.8 m^2 を測る。

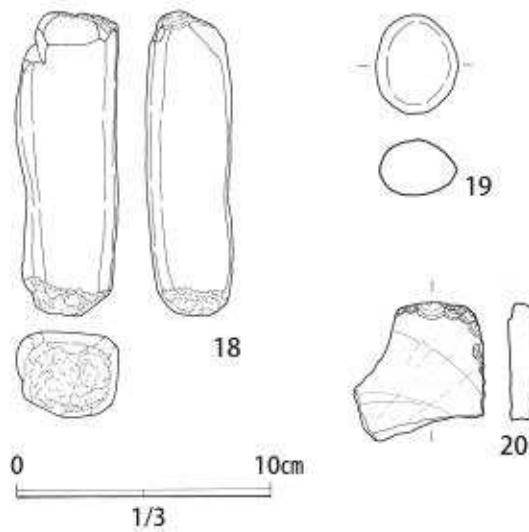
隣接する SA1 に切られていることから、これよりも古いことがわかる。遺構の南端には 0.3 m ほどのステップ状の張り出しが見られ、その底面は硬化していたことから、出入口としての可能性がある。遺構の断面形は緩やかに立ち上がり、深さは検出面から 0.2 m である。遺構埋土は黒褐色シルトを基本としたもので、II 層に対応するものである。底面付近の土層断面には部分的な硬化も認められたことから、貼床を施している可能性もある。床面を精査したが、柱穴やその他の付帯施設を確認することはできなかった。

SA2 からは土器が数点出土している。出土土器は遺構の東半に偏っており、かつ埋土上位から出土しているものが大半である。

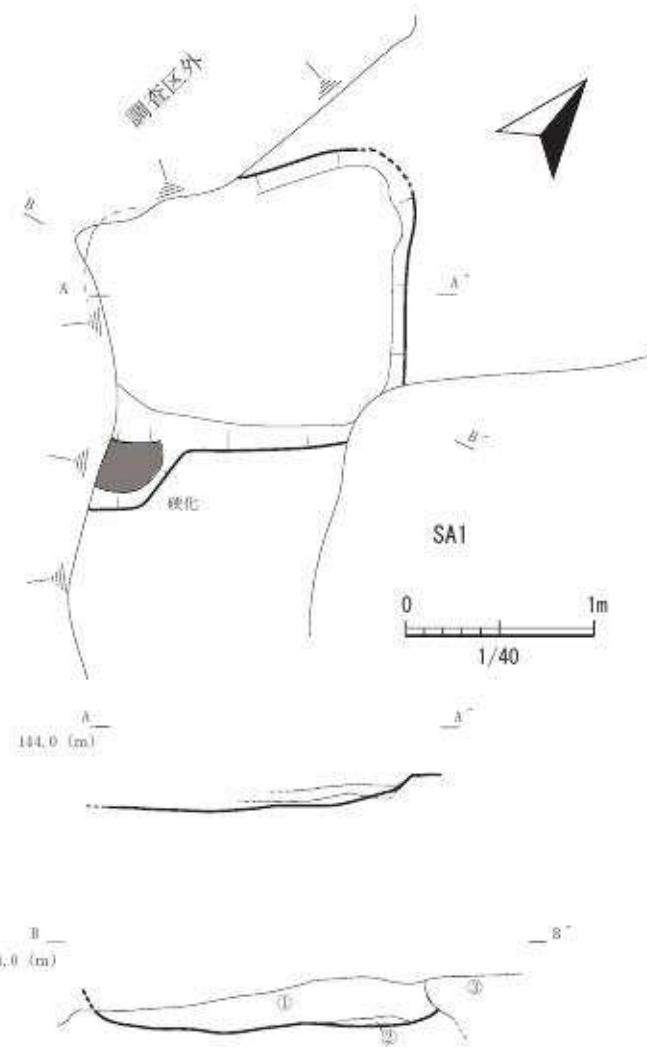
出土土器は小片となっており、埋土中から浮いたような状態で出土している。このことから、これらの遺物が直接的に SA2 の年代を示すかは不明である。

21～23 は高杯である。23 は柱状の脚部と考えられる破片で、欠損しているものの円形透孔が認められる。24 は壺の頸～胸部である。緩い S 字状の屈曲がみられる。外面は工具によって段がつけられ、いわゆる「カキアゲ」状の調整となる。25 は壺の口縁部で端部はやや丸く仕上げられている。

これら出土土器から、SA2 は弥生時代終末期から古墳時代初頭の年代幅に位置付けられる。

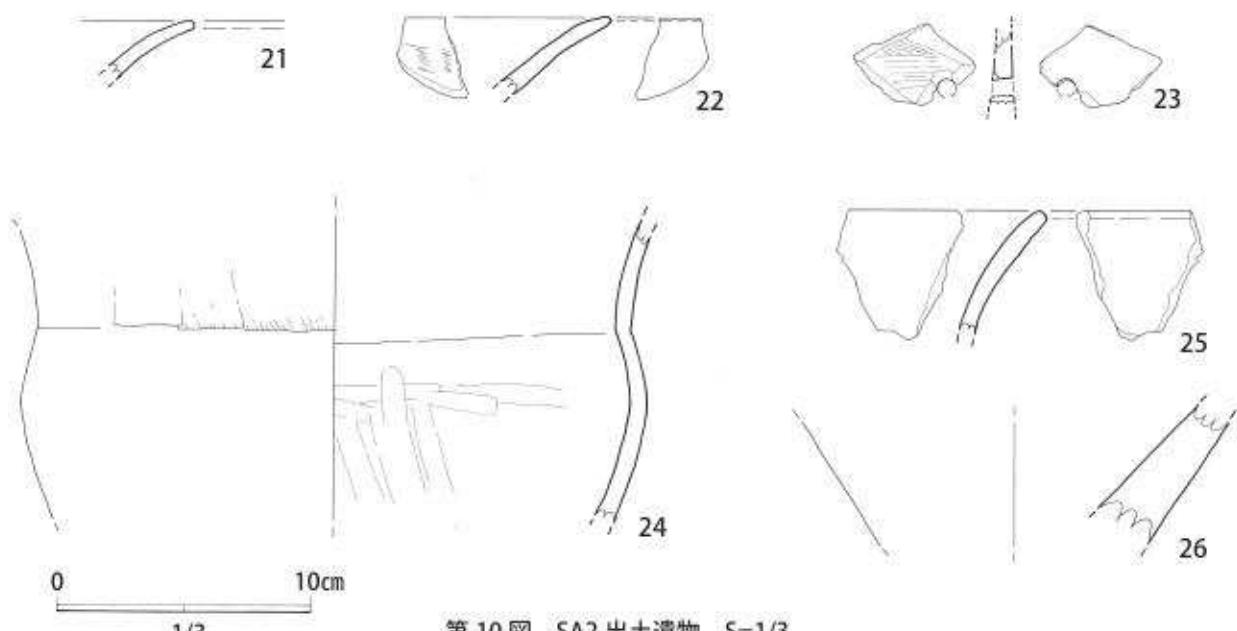


第8図 SA1 出土遺物② S=1/3



①：黒褐色 (7.0YR3/1) シルト 2cm以下の黄色蛭石多く含む
②：①層とは同じだが、やや硬化している
③：黒褐色 (7.0YR3/1) シルト 2cm以下の蛭石ほとんど含む SA1埋土

第9図 SA2実測図 S=1/40



第10図 SA2出土遺物 S=1/3

2) 土坑 (SC)

SC1 (第11図・第12図)

調査区の南端、削平によって御池軽石層(IV層)が露出した部分で検出された。略方形を呈すると思われる土坑である。遺構上端は大きく削平されていることから、詳細な規模は判然としないが、残存部を見る限り、 $1.6(+\alpha) \times 1.4$ (m) を測る。遺構の断面形はややいびつな箱形を呈しており、段落ち状となるところが見られる。遺構埋土は黒色シルトのみが堆積しており、自然埋没と考えられる堆積状況を示している。

隣接するSC2とは遺構床面のレベルがほぼ同一であることや埋土の特徴に違いは見られないことに加え、両者とも同一の特徴を示していることから、これらは同時期に作られた可能性もある。あるいは同一の遺構となる可能性もあるが不明である。

SC1の埋土からは土器小片が出土している。これらの内、実測図化できたのは6点である。器種には甕、高杯が確認できた。

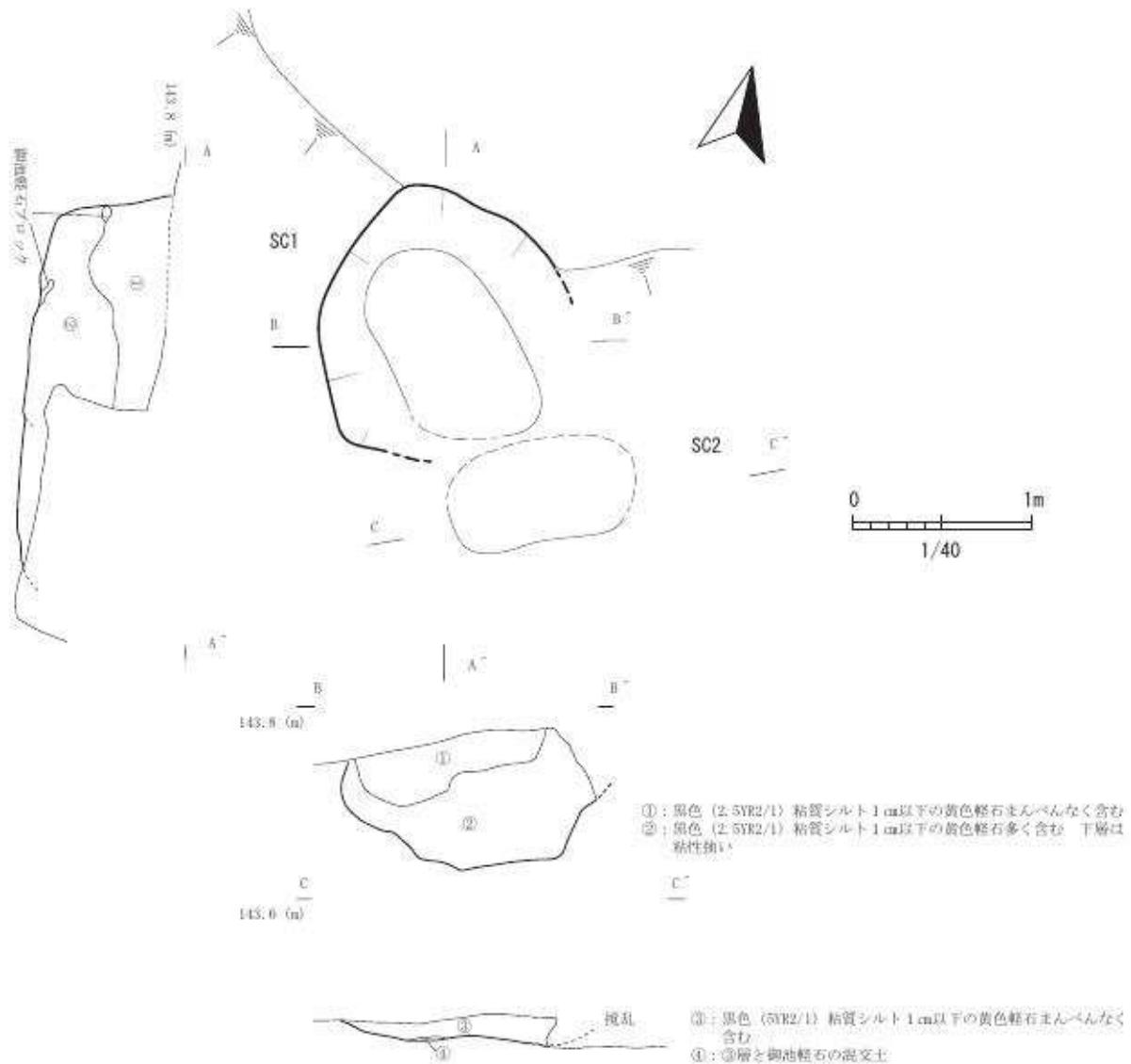
27は小型丸底甕の口縁部と思われる。28は甕の底部である。外面にはオサエの痕が連続して残っている。29は高杯の口縁部である。30は甕の胴部で刻目突帯が貼付される。刻みはやや太めの押圧刻みで内面には布目圧痕が残る。胴部内面にはハケ調整が残っている。31は粗製の鉢の口縁部と考えられる。32は甕の頸部である。内面に稜線が残っている。

SC1から出土した土器は、弥生時代終末期から古墳時代前期に位置付けられるものである。

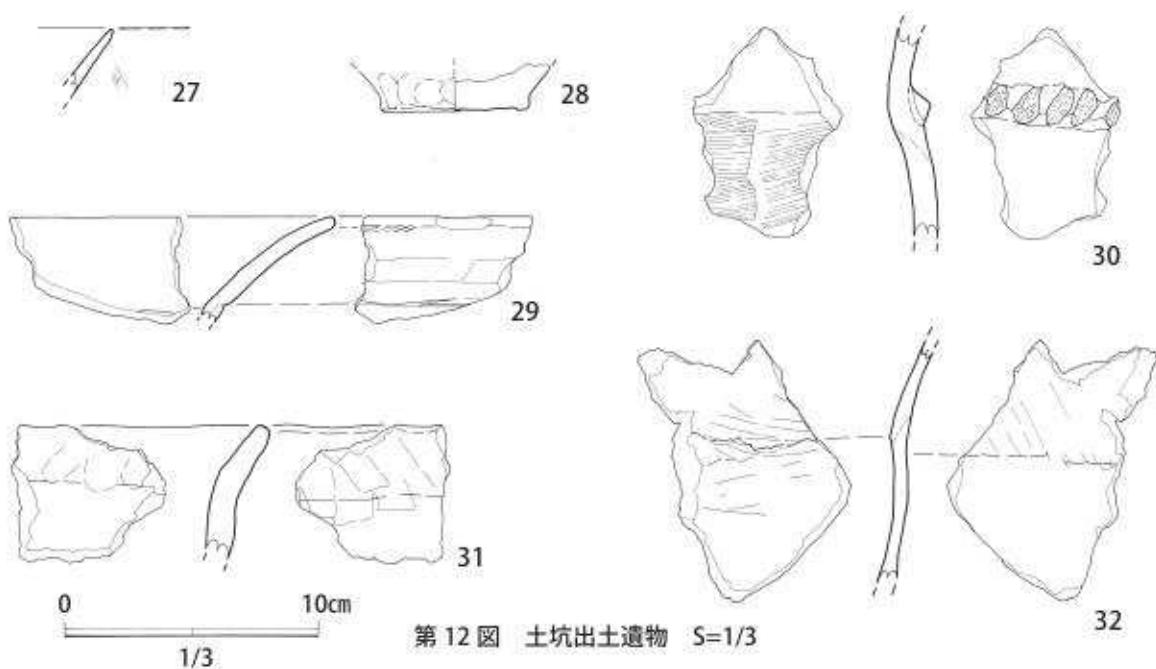
SC2 (第11図)

調査区の南端、削平によって御池軽石層が露出した部分で検出された。SC1のすぐ南に隣接しているものと思われる。遺構は大きく削平されており、下端のみがわずかに検出された。平面形は長方形を呈するものと思われ、主軸は東西方向にある。検出された下端の長軸は1.1 m程である。遺構は大きく削平されていたものの、周囲における土層の堆積状況から推測すると、本来は1 m以上の深さを持っているものと考えられる。遺構埋土は黒色粘質シルトが堆積しているのみである。床面付近にはわずかに御池軽石のブロックが混じっていた。

SC2からは遺物は出土していない。



第11図 SC1・SC2 実測図 S=1/40



第12図 土坑出土遺物 S=1/3

3) 包含層出土遺物（第13図～第15図）

今回の調査では、削失を免れて残存していたⅡ層からも遺物が出土している。特に出土した土器は、先述した竪穴建物跡や土坑と同様に、弥生時代終末期から古墳時代前期に位置付けられるものが大半となっている。遺物は小片となっているものも多い。遺物は調査区内からまんべんなく出土しているものの、遺構上やその周間に多く分布している傾向が伺えた。また、遺構内出土のものと接合するものも見られた。

今回の発掘調査で、包含層から出土した遺物はコンテナケース約4箱分であり、土器、土製品、石器が出土している。これらの内、29点を実測図化した。

i 土器（第13図）

包含層から出土した土器には、壺、甕、高杯、鉢、手づくね土器が認められた。

33は壺の口縁部である。二重口縁となるもので外面にはヘラ描による波状文が施される。胎土には細かい砂が多く混じっている。34は広口壺の口縁部である。口径は19.6cmを測る。口縁端は丸く仕上げられる。内外面ともにナデで仕上げられる。中型の壺と考えられる。35は小型丸底壺の口縁部である。口縁端は尖りぎみとなる。頸部付近には工具によって連続した刺突がみられる。器壁は薄く、胎土は精製されたものを使用している。

36は甕の口縁部である。内外面ともに明瞭にハケの痕が残っている。37は甕の口縁部である。端部は平坦に面取りされる。外面にはススの付着が認められる。38は小型の甕である。口径は16.6cmを測る。無文で内外面ともにナデによって仕上げられる。胎土には砂礫が多く目立っている。39は甕の口縁部で端部は丸く仕上げられている。内面にはコゲが付着している。40・41は甕の胴部で刻目突帯が貼付される。40の突帯の断面は三角形状になっている。刻目は鋭利な工具によってつけられている。41は棒状工具による押圧刻みで、内面には布目状圧痕がわずかに残る。胎土には砂礫が多く目立っている。42・43は甕の底部である。42は平底の底部で内面にはわずかに工具痕が残っている。胎土中には砂礫が多量に含まれている。43は脚台状の平底である。小型甕の底部と考えられる。底径は5.2cmを測る。44は甕の胴部で下半付近と考えられる。外面にはタタキ状の調整が格子目状に確認できる。内面には当て具等の痕は確認できない。内面にはコゲが付着している。

45～47は高杯の口縁部である。45は小型の高杯と考えられる破片で、口縁端部がわずかに外反する。外面には斜め方向のミガキが施されている。46には内面に横方向のミガキが施される。口唇部付近はナデによって仕上げられている。47の内面には斜め方向のミガキが施されており、外面には何らかの圧痕と思われるスタンプが残る。胎土中には光沢を持つ微細な鉱物が多く入っており、目立っている。48は鉢で口縁端の外面には波状文が認められる。外面には縦方向のミガキが残っている。胎土中には黒色に光る鉱物を含んでいる。49・50は台付鉢と考えられる破片である。いずれも小型のものと考えられる。49は胴部で脚台部との接合面で剥離している。外面には工具による調整痕が残る。50は脚台の底部で底径は3.6cmを測る。外面には指頭によるオサエの痕が明瞭に残っている。胎土には砂礫が多く混じっている。

51～54は手づくね土器である。尖底ぎみのものが多い。いずれも指頭によるオサエの痕が明瞭に残っている。53は指頭によるオサエが明瞭に残っている。砂礫を多く含んでいる。54もオサエによって整形されているが、粘土が乾燥している時に整形されたものとみられ、クラック（ひび割れ）も多く目立っている。大粒の砂礫を含んでいる。

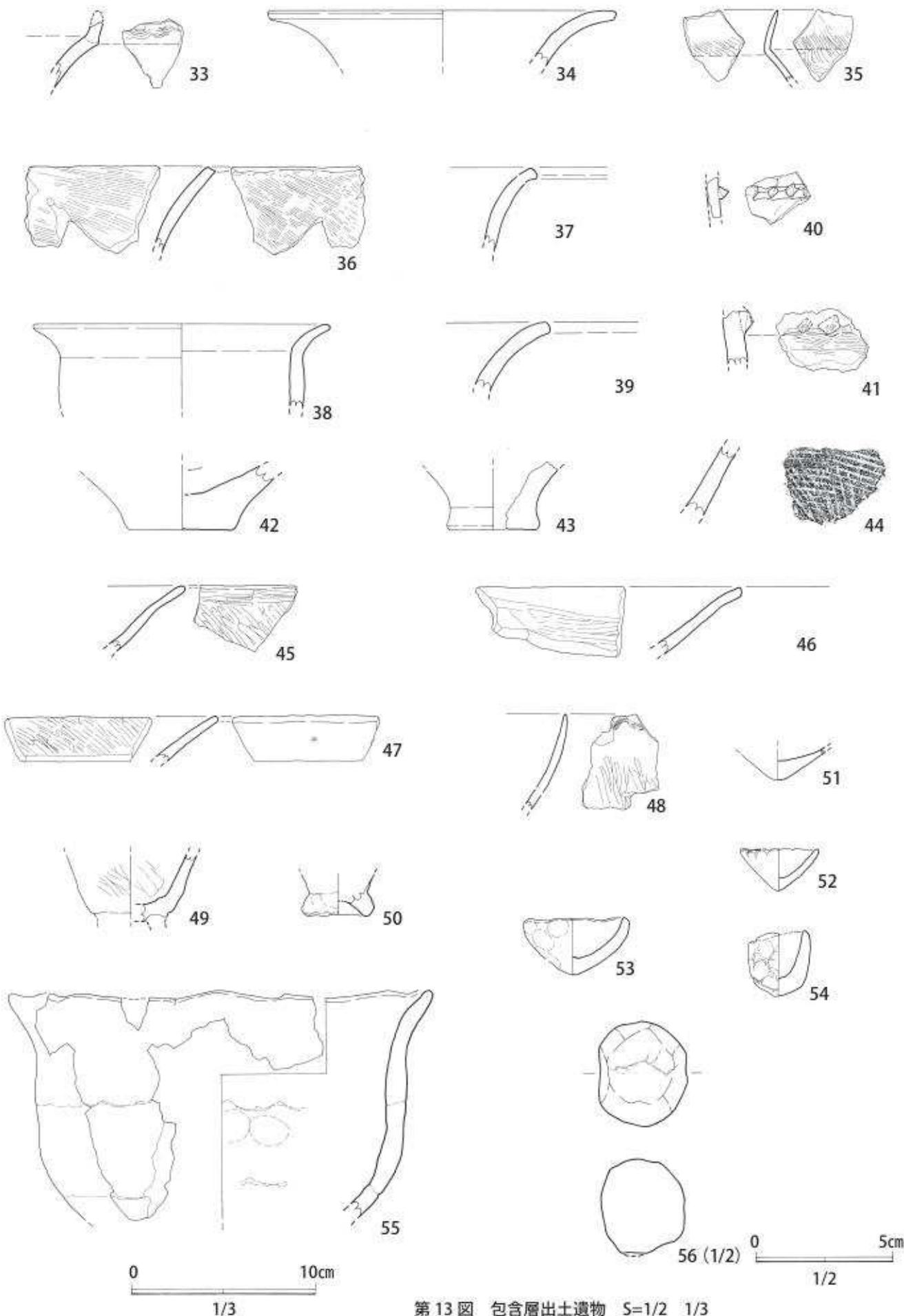
55は粗製の鉢である。口縁部は波状となり、全体的な器形はバケツ状を呈している。口径は22.4cmを測る。器壁も厚く、接合線も明瞭に残っている。外面にはススの付着が見られるほか、剥落している面も認められることから、煮炊き等に使用されたものと推定される。

ii 土製品（第13図）

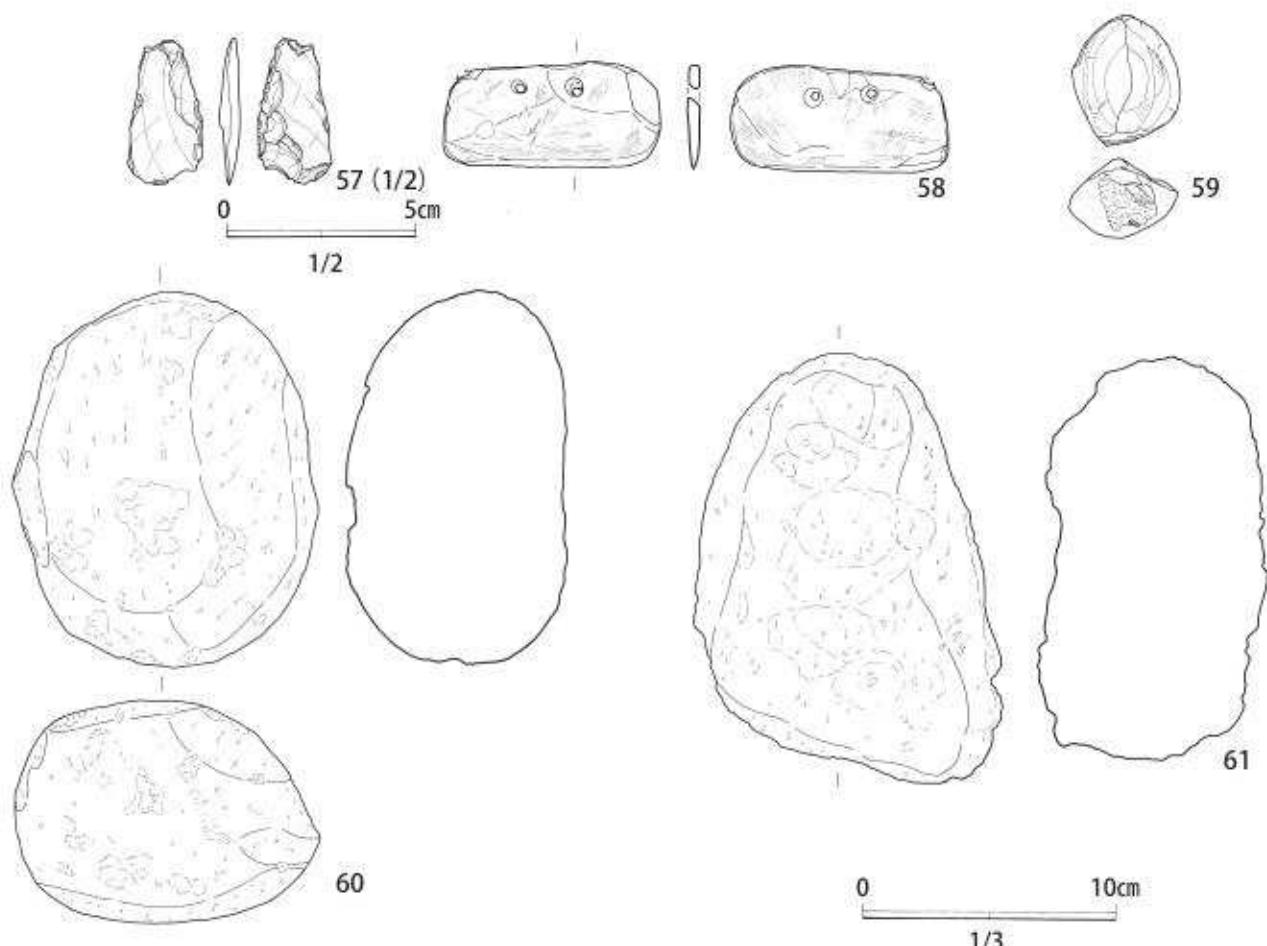
球状の土製品が1点出土している。56の形状は梢円形を呈し、重量は39gを量る。外面は指頭によって整形されている。胎土には他の土器と同様に複数種類の砂礫が混じっている。形状と重量から投弾としての機能も想定されるが、正確な用途は不明である。

iii 石器（第14図）

57は磨製石鎌の未製品である。石材は頁岩を使用している。右側縁の調整までで終了している。重量は4g



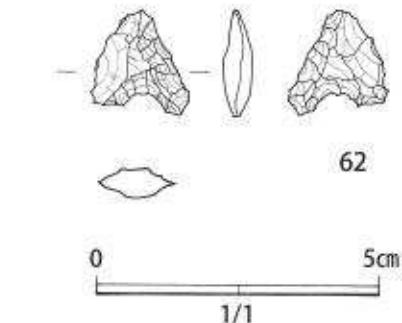
第13図 包含層出土遺物 S=1/2 1/3



第14図 包含層出土遺物② S=1/2 1/3

を量る。58は磨製石庖丁である。直背直刃型で背の端部の一部が欠損しているのみの製品である。紐掛け用の穿孔が2箇所認められる。石材は頁岩を使用している。正面・背面とも刃部を中心と擦痕がみられる。重量は27gを量る。59は敲石である。頁岩の母岩を使用しており、下面に細かな敲打痕が多数残っている。半分ほど欠落しており、これは使用中に欠損した可能性もある。重量は72gを量る。

60・61は軽石礫である。60は梢円形の形状を呈し、複数面に面取りがなされた痕がある。全面にスス状のものが付着し、黒色化していることから、被熱しているものと考えられる。遺構内から直接出土したものではないが、SA1のすぐ南から出土しており、この遺構と関連ある可能性もある。煮焼き等の火を使用する行為等に使用されたものと推定される。重量は890gを量る。61にも面取りが見られるほか、抉られたように凹む面も見られる。重量は482gを量る。被熱した痕は見られない。



第15図 繩文時代の遺物 S=1/1

II層より打製石鏃が1点出土している。62は形状から縄文時代の所産と考えられる。完形で残存している三角形の形状を呈しており、凹基式の打製石鏃である。右側縁に細かな剥離調整がみられるのに対し、左側縁は粗い調整のみである。重量は0.6gを量る。石材は黒色のチャートを使用している。

第4節 縄文時代の遺物（第15図）

II層より打製石鏃が1点出土している。62は形状から縄文時代の所産と考えられる。完形で残存している三角形の形状を呈しており、凹基式の打製石鏃である。右側縁に細かな剥離調整がみられるのに対し、左側縁は粗い調整のみである。重量は0.6gを量る。石材は黒色のチャートを使用している。

第1表 繩瀨横尾第3遺跡出土土器觀察表

第2表 繩瀨横尾第3遺跡出土土製品觀察表

標的番号	物語名	周	距離	面積	最大長 [cm]	最大幅 [cm]	最大深 [cm]	重量 [g]	備考
00	漁港A	半	航行中	完航	18	32	34	35	右翼:魚網-52985(2)

第3表 繙瀨橫尾第3遺跡出土石器觀察表

標因番号	地区名	層	地質	厚さ	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材等	備考
18	山田	中層	花崗岩・燧石		120	55	34	248	多孔	花崗岩・燧石・板状面・半角面・半斜面・上・下斜面・扁角面
19	S41	中層	花崗岩		33	34	21	26	多孔	分離面直
20	S42	下層	鷹巣丸石		46	52	11	12	燧石變面斜	一箇江上・鷹巣丸石直
21	夷隅区	1	夷隅本造品		38	13	25	3	多孔	
22	夷隅区	2	石造物	46	42	33	25	多孔	夷隅石海王	
23	夷隅区	3	石塊・燧石	53	42	28	32	多孔	好品質燧石	
24	夷隅区	4	礫石		148	121	87	880	板石	鷹巣丸
25	夷隅区	5	砾石		166	122	95	382	燧石	
26	夷隅区	6	石質石頭	22	14	64	68	チヤート(類)		

第4章 総括

縄瀬横尾第3遺跡の発掘調査では、弥生時代終末期～古墳時代前期前葉に位置付けられる集落跡の一部と考えられる遺構、遺物が検出された。これまで、古墳時代の地下式横穴墓群として知られていた当遺跡は、それ以前に集落が存在していたことが明らかとなった。ここでは今回の発掘調査成果について、簡単ながらまとめておく。

まず、検出された堅穴建物跡2軒 (SA1・SA2) は、どちらも規模は小さく、小型の堅穴建物として分類される。貼床はSA1のみ検出された。SA1から出土した土器をみると、甕は頸部に稜を持ち、口縁部が上方へと立ち上がる器形を呈するものが見られる(5)。高杯は円形透孔を有するもの(17)が見られる。杯部の形状には、断面形が緩いS字状となっているものが見られる(14)。また、SA1出土土器の中でも、特徴的な小型精製器種(2)は類似品が都城市内の向原第2遺跡等で出土している。

遺構の切り合い関係からは、SA2よりもSA1が新しいことが明らかであるが、このことを傍証するようにSA2から出土した甕(24)は頸部に明瞭な稜を持っており、やや古いものと考えられる形状を示している。このほか、検出された土坑2基(SC1、SC2)も前述した堅穴建物跡と同時期かやや新しい時期と考えられる遺構である。また、包含層出土土器もこれと大差はない。

このような土器の特徴は、宮崎平野部における当該期の土器編年(松永2001)に照らすと、松永5・6期に該当するものと考えられ、弥生時代終末期～庄内式併行期と捉えられる。基本的な土器組成は宮崎平野部と同様であることから、都城盆地の当該期土器も同段階に位置付けることができる。さらに、周辺地域の人吉盆地における同時期の土器編年(壇2004)にも照らすと、球磨IIa期から球磨IIb期にかけての資料に類似点が見られる。これらは庄内式から布留式併行と考えられており、宮崎平野部の編年との間には、わずかながら離隔が見られるものの、大きくは弥生時代終末期から古墳時代前期前葉の時期幅を持つものとして捉えることができる。

都城市内では、ほかにも加治屋B遺跡、向原第2遺跡、山ノ田第1遺跡、前畠遺跡等において同時期と考えられる集落遺跡が見つかっており、出土土器の特徴も類似している。これらの遺跡で見つかっている堅穴建物跡にも複数のプラン、サイズが認められるほか、いわゆる「日向型間仕切り住居」や「花弁状住居」と呼ばれる、土壁による間仕切り施設を持つ堅穴建物跡が見つかっている。

また、都城市内に限らず宮崎県内では、同時期の集落遺跡から石庵丁が多く出土する傾向にある(長津2004)。本遺跡の調査でも完形の磨製石庵丁(58)が出土しており、この点においても、共通した様相が認められる。このほか、南九州における同時期の遺跡では鉄器が出土している事例も見られるが、今回の調査では出土していない。

今回の縄瀬横尾第3遺跡の調査から、横尾地下式横穴墓群が造営される以前には集落が存在していたことが明らかとなり、その様相がわずかながら明らかとなった。今回検出された遺構・遺物は、地下式横穴墓群の造営時期とは年代的に開きがあるものの、古墳時代におけるこの地域の集團動向を検討する上で重要な成果といえる。

遺跡は学校の造成等により大きく削平を受けているものと考えられるが、今後も周辺における各種開発に際しては、これらの存在にも留意しておく必要がある。

【引用・参考文献】

- 壇佳克 2004 「人吉盆地における古墳時代の土器編年について」『熊本古墳研究』2 熊本古墳研究会
長津宗重 2004 「日向における石包丁の展開」「西南四国一九州間の交流に関する考古学的研究」 愛媛大学法文学部
松永幸寿 2001 「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』17 宮崎考古学会
都城市教育委員会 1996 「丸谷地区遺跡群 中大五郎第1遺跡 中大五郎第2遺跡 本池遺跡 前畠遺跡」都城市文化財調査報告書(34)
都城市教育委員会 2007 「加治屋B遺跡 縄文時代・弥生時代編」都城市文化財調査報告書(81)
都城市教育委員会 2009 「向原第2遺跡(第3次調査)」都城市文化財調査報告書(92)
都城市史編さん委員会(編) 2005 「都城市史」資料編考古 都城市
宮崎県教育委員会 1996 「山ノ田第1遺跡」県道高城・山田線緊急道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
宮崎県埋蔵文化財センター 2004 「下那珂遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(90)
吉本正典 1993 「日向の庄内式併行期の土器」『考古学ジャーナル』363 ニュー・サイエンス社

写真図版 1



調査地点（着手前・西から）



作業状況



包含塔手づくね土器（SA2）出土状況



包含磨石甕（SA3）出土状況



SA1 検出状況（北から）



SC1 検出状況（西から）



SA2 埋土堆積状況（SA1との切り合い）



SC2 検出状況（西から）



SA1 埋土堆積状況 (西から)



SC1 埋土堆積状況 (南から)



SA1 完掘状況 (東から)

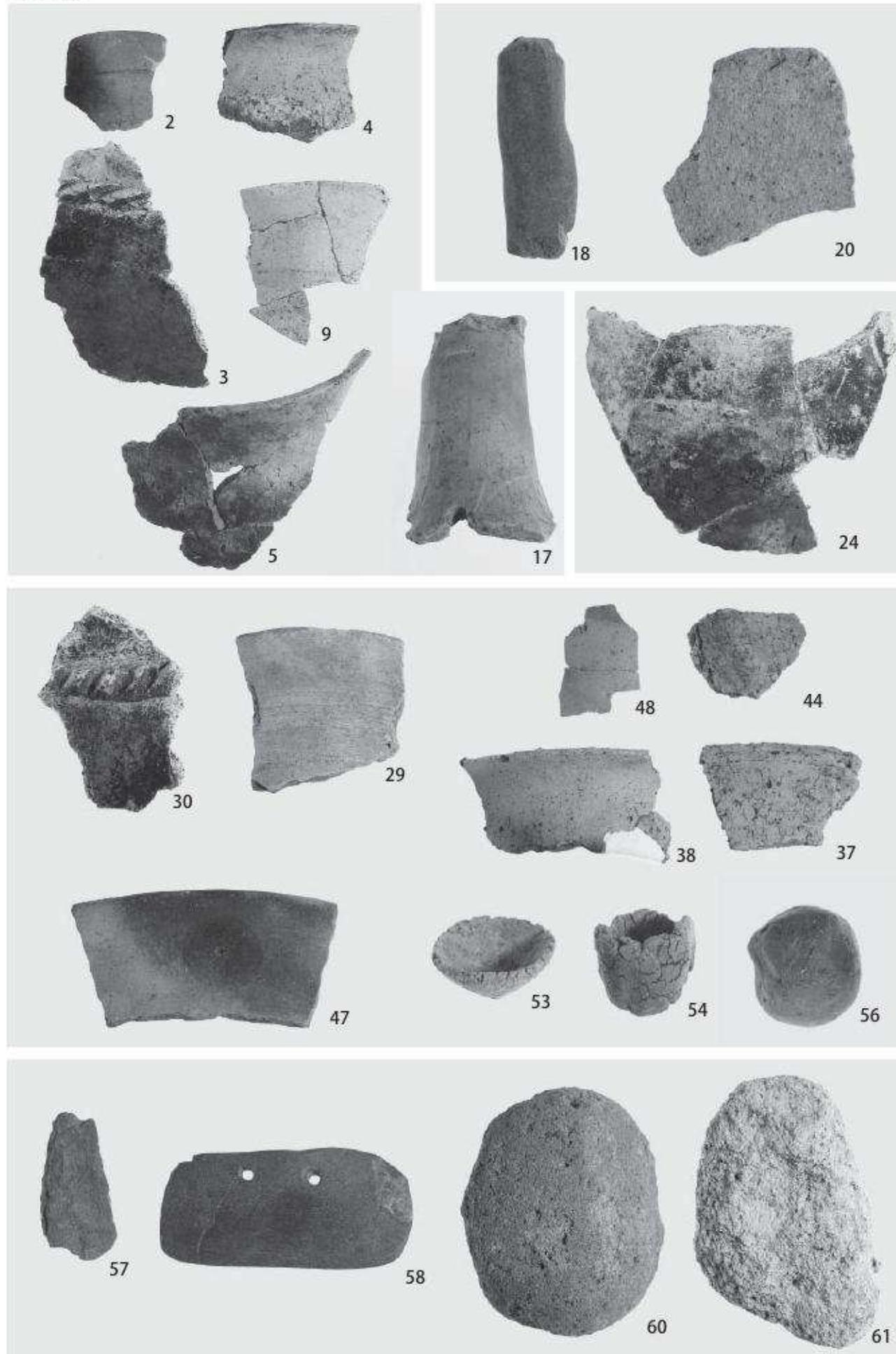


SC1・SC2 完掘状況 (西から)



調査区全景 (北から)

写真図版3



付編 縄瀬横尾第3遺跡出土土器の圧痕調査報告

中村直子

1 対象資料および調査方法

1) 調査対象と調査

土器圧痕調査の対象としたのは、縄瀬横尾第3遺跡から出土した土器のうち、弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器 1199 点 (13205g) である。調査は、2015年8月7日に都城市教育委員会文化財課整理室において行った。調査者は大西智和・寒川朋枝・中村直子である。

2) レプリカ法の作業手順

作業手順については、以下の通りである。

- ① 資料を収納されているコンテナケースごとに肉眼および実体顕微鏡により土器圧痕部を観察し、植物・昆虫・貝などの可能性のあるものを抽出する。
- ② 圧痕部を洗浄し、土器全体写真および実体顕微鏡による圧痕部の拡大写真を撮影する。
- ③ 離型剤（アセトン・バラロイド B-75 溶液）を圧痕部に塗布し、印象剤（ブルーミックスソフト）を圧痕部に充填する。
- ④ やや硬化した印象剤をマウントに盛り、圧痕部と接合して硬化させる。
- ⑤ 硬化後、レプリカを取り外し、圧痕部の離型剤をアセトンで洗浄する。
- ⑥ 作成したレプリカを走査電子顕微鏡（日本FEI XL30CP）で観察、撮影し、同定する。

なお、印象剤以外の手順や材料は比佐陽一郎氏・片多雅樹氏が考案した方法（比佐・片多 2005）に基づくものである。圧痕種類の同定は中村が行った。

2 調査結果と成果（第4表、第16図）

同定結果は第4表のとおりである。003は細長い梢円状の圧痕である。圧痕面がゆるやかに湾曲し、周縁部は器面奥に入り込んでいる。中心には1本の隆起部が認められ、その他の葉脈痕は認められない。シダ類の小羽片かイチイ類の葉が推定される。004は平面形が丸く断面が少し扁平な形状を呈する。サイズと形状からアワ穎果に類似すると考えられるが、ヘソ等の特徴的な部分が不明なため、不明種子とする。005は表面に顆粒状突起が認められ、主軸方向中央部に幅広の隆起部がある。先端はないが、護穎と軸が残る。イネ *Oryza sativa* の穎果である。

都城市内では縄文時代晩期後葉の突帯文期には黒土遺跡や坂元B遺跡などでイネが検出されており、水田関連遺構も存在する事から、この時期には栽培が開始されていたと考えられる。本調査結果は、弥生時代終末期から古墳時代初頭の都城盆地でのイネの検出例としては初出となったが、すでに検出されていた弥生時代中期・古墳時代中期の間を埋める結果となった。都城市内での他の穀類の検出例を見ると、縄文晩期突帯文期にはイネ・アワが、弥生時代中期にキビが加わるが、不明種子とした004がアワもしくはキビだと仮定しても、これまでの結果と整合的であると考える。

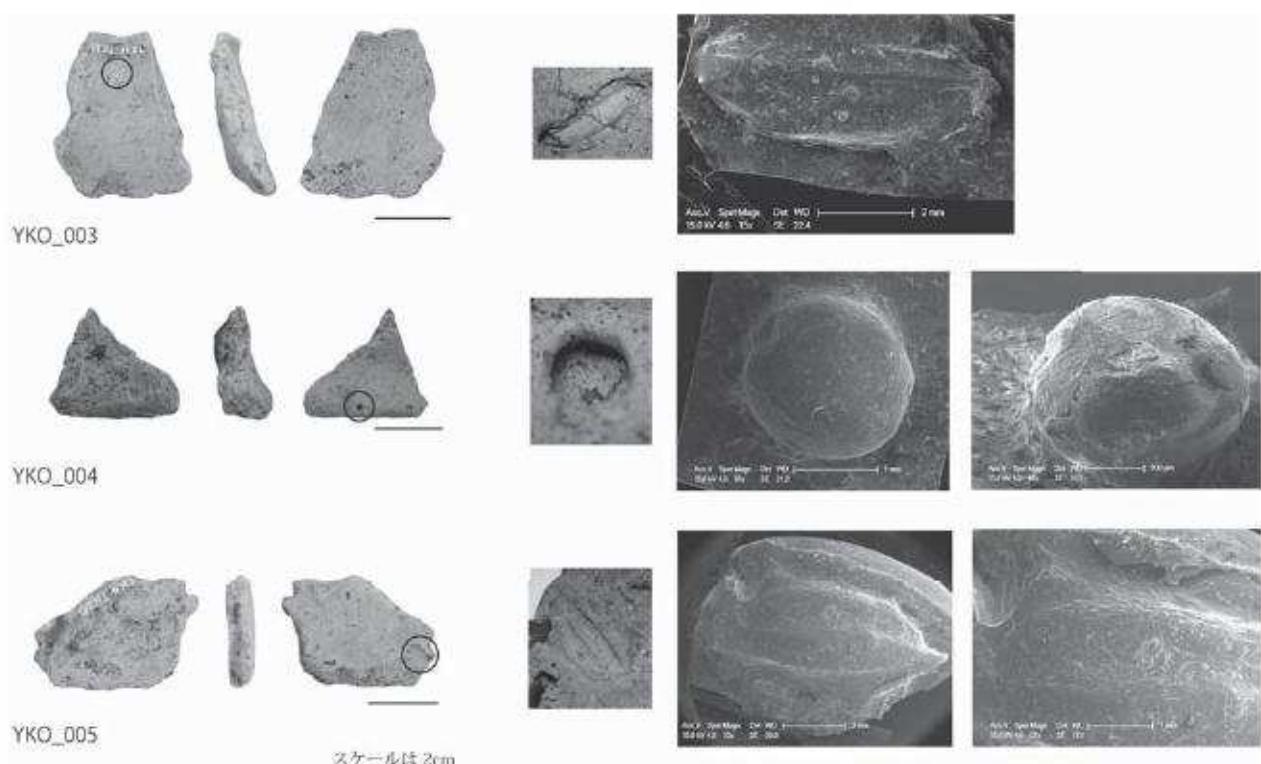
文献

比佐陽一郎・片多雅樹 2005 「土器圧痕レプリカ法による転写作業の手引き」 福岡市埋蔵文化財センター

第4表 繩瀬横尾第3遺跡出土土器と圧痕属性

圧痕 整理番号	出土地 点・層位	時期	器種	検出部位	検出面	圧痕の種類	長さ・幅・ 厚さ (mm)	備考
YKO-003	TR・1層	弥生終末～ 古墳初頭	小型台付鉢	脚部	内面	葉	6.27・ 2.40・-	
YKO-004	TR SN ベルト・ 2層	弥生終末～ 古墳初頭	小型甕	脚部	外面	不明種子	1.85・ 1.87・ 1.2*	
YKO-005	TR・2層	弥生終末～ 古墳初頭	甕	胴部	外面	イネ (糊付き)	6.15*・ 3.47・-	小穂の軸付

*は残存部



第16図 繩瀬横尾第3遺跡出土土器の圧痕

付編 都城市立縄瀬小学校収蔵考古資料について

1 収蔵資料の経緯

縄瀬横尾第3遺跡の発掘調査に着手する前、文化財課職員が事前（平成26年4月8日）に都城市立縄瀬小学校を訪問した際、校舎に付設された展示ケースに弥生時代、古墳時代の土器・石器が展示されていることを確認した。ケース内にはパネル・キャプションも掲げられており、その内容によると、展示資料は縄瀬小学校内およびその周辺（共和地区）で採集されたものであることが伝えられていた。学校側に伺うと、いつごろこのような形で展示されたか、経緯等は不明とのことであったが、キャプションは比較的新しかったことから、近年になって授業の一環等で作られたものと考えられる。

発掘調査終了後に、これらの資料を学校側の許可を得て一時借用し、都城市教育委員会文化財課にて注記、実測および写真撮影を行なった。これらの記録作業後に資料は学校側へ返却した。

資料の詳細な採集地点や採集された経緯等は不明であるが、これらは弥生時代から古墳時代にかけての遺物が大半であり、今回の縄瀬横尾第3遺跡の発掘調査出土資料とも大きく関わるものもあることから、実測図化できたものの一部を報告する。収蔵資料の内訳は土器13点、石器2点、礫2点である。これらのうち、土器11点、石器1点の実測図を掲載しておく。

2 資料詳述

土器

No.1は二重口縁壺の口縁～胴部である。口縁端は欠損しており、形状不明であるが、大きく伸びるものではないものと考えられる。器形は口縁部が外反し、頸部で大きくくびれており、肩部から胴部は張りを持って球状にふくらむものと考えられる。頸部には一条の刻目突帯が貼付される。刻目は棒状工具による押圧刻みである。最終的な調整は内面・外面ともにハケである。形状から古墳時代前期の所産と考えられる。

No.2は広口壺の口縁部である。頸部と胴部の接合面を境に割れている。口縁端は欠損しており、細かな形状は不明である。外方へと大きく開き、器壁も厚く、大型の器種と考えられる。内面には工具ナデによる調整が認められる。

No.3は手づくね土器である。完形で残存している。口径は3.2cmほどしかない。非常に小型でオサエによる整形が認められるのみである。ラベルによれば、昭和39年11月に縄瀬小学校内で採集されたものと見られる。

No.4は小型鉢である。完形で残存している。口縁部は内湾する碗形の器形を呈する。口径は5.2cmを測り、底径2.1cm、器高5.0cmを測る。調整は内・外面ともにナデにより仕上げられる。胎土は精製されたものが用いられている。ラベルによれば、昭和39年11月に縄瀬小学校内から出土したことが伝えられている。弥生時代終末期～古墳時代初頭の所産と考えられる。

No.5は高杯の脚部である。裾部は欠落しているものの、端部へ向かってくびれ、外方へと聞く器形を呈する。外面には細かなミガキが縦方向に施されている。器形の特徴から古墳時代前期の所産と考えられる。

No.6は壺の口縁部である。復元口径は24.2cmを測る。頸部には1条の刻目突帯が貼付される。刻目は棒状工具による押圧刻みが施され、刻目内には布目の痕が認められる。外面は粗い工具ナデによって調整され、内面には板状工具による調整痕が残る。外面全体にススが付着している。弥生時代終末期～古墳時代前期の所産と考えられる。

No.7は壺の口縁部である。頸部には刻目突帯が付される。刻目は棒状工具によってつけられており、「×」字状に連続して施文されている。内面はハケ調整によって仕上げられる。胎土中には、3mm以下の砂粒を多く含み、赤褐色砂が目立つ。古墳時代前期の所産と考えられる。

No.8は壺の口縁部である。口径は22.2cmである。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く仕上げられる。胴部はやや膨らむ。外面にはススの付着が全面に認められる。弥生時代終末期の所産として考えられる。

No.9は壺の胴～底部である。ラベルによれば昭和41年2月に縄瀬共和地区で採集されたものとされる。底面は上げ底状になっており、外面には指頭によるオサエが認められる。底径は5.8cmを測る。胴部外面にはハケメが明瞭に残っている。内面には多量のコゲが付着している。器形から弥生時代後期の所産と考えられる。

No.10は壺の底部である。底径は5.1cmを測る。底面はわずかに凹んでおり、上げ底状となっている。外面は

指頭によって調整されており、オサエの痕が残っている。また、外面には茶褐色の有機質が付着している。弥生時代終末～古墳時代前期の所産と考えられる。

No.11は甕の底部である。底面は平底となり、凸レンズ状になるものと思われる。外面には工具ナデ、オサエの痕が見られる。ラベルによると、昭和41年2月に繩瀬地区共和で出土したとされる。形状から古墳時代前期の所産と考えられる。

石器

No.12は打製石斧である。ほぼ完形で残存している。使用面には欠損している箇所も見られる。刃部には細かい調整剥離が見られる。重量は142gを量る。石材はホルンフェルスを使用している。基部には斜位の線状痕が見られ、これは柄部着装による使用痕と見られる。形状から縄文時代から弥生時代にかけての所産と考えられる。

これらの所蔵資料のうち、資料採集者の中には、当時の学校長名もあることから、これら的一部が繩瀬小学校敷地内で採集された蓋然性は高い。学校内では昭和40年3月に現在の校舎とほぼ同位置に鉄筋2階建の教室棟、同41年4月には屋外プールが完成している。今回報告した資料は、このような工事に伴って出土した可能性もある。

主に弥生時代後期～古墳時代前期の土器が採集されていることから、今回発掘調査を実施した繩瀬横尾第3遺跡の出土資料も含め、繩瀬小学校の近辺では弥生時代後期から古墳時代前期にかかる時期まで集落が存在していた可能性を示唆する資料としても重要である。

今回報告した資料は、現在も都城市立繩瀬小学校内に収蔵・保管されている。

【参考文献】

高崎町史編纂委員会 1992『高崎町史』高崎町

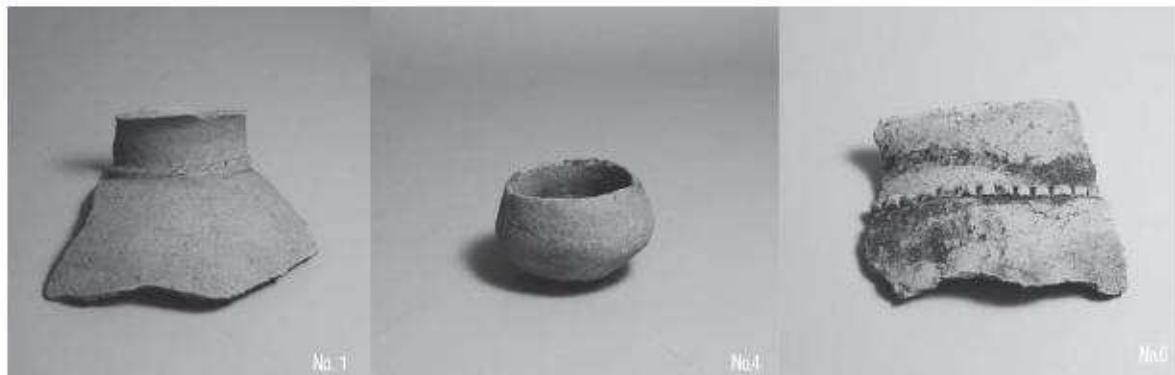
第5表 都城市立繩瀬小学校収蔵資料観察表

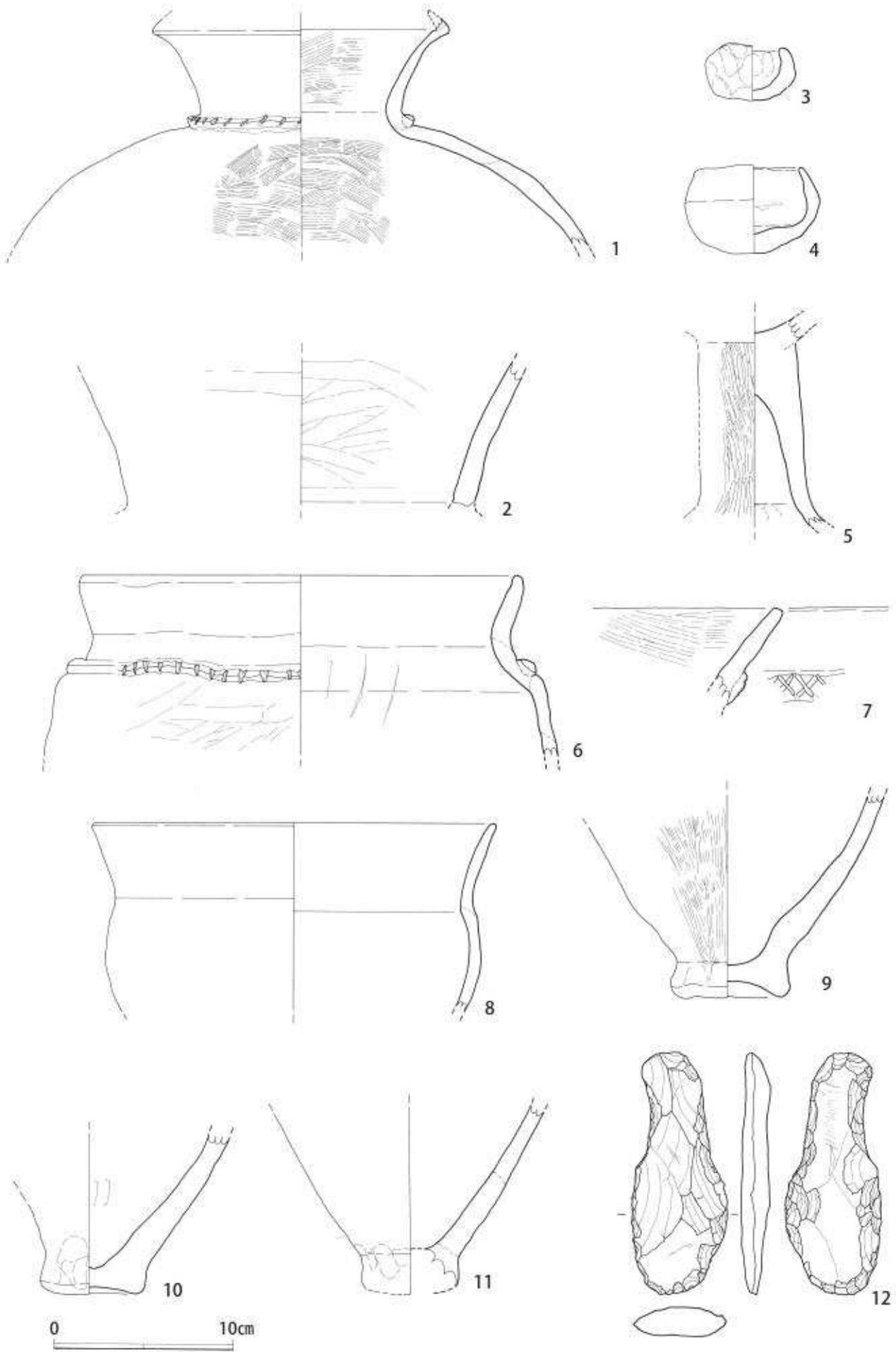
【土器】

No.	器種	部位	測定(内)	測定(外)	色調(内)	色調(外)	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	断土	備考
1	甕	口～胴部	ハケ ナデ	ハケ ナデ 補加焼	橙(5YR7·6) ～褐灰(5YR5·1)	橙(5YR7·6)				2mm以下の白色、赤褐色、灰色剥離じる	
2	甕	口	工具ナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)				1mm以下の褐色、白色剥離じる	
3	少々五角	口～底部	オサエ	オサエ	棕(7.5YR6·6)	棕(7.5YR6·6)	32	16	32	3mm以下の白色、赤褐色、灰色剥離じる	昭和39年11月繩瀬小学校内で採集
4	甕	口～底部	ナデ	ナデ	棕(7.5YR7·6)	棕(7.5YR7·6)	52	21	50	1mm以下の白色、黑色剥離じる	昭和39年11月繩瀬小学校内で採集
5	高杯	脚部	ナデ オサエ	ミガキ	浅黄緑(10YR8·4)	浅黄緑(10YR8·4)				2mm以下の白色、赤褐色、灰色剥離じる	
6	甕	口～胴部	鉛口にはる腰 端	工具ナデ	棕(5YR7·6)	淡紫(5YR8·3)	24.2			2mm以下の白色、赤褐色、灰色剥離じる	外直スリット着
7	甕	口	ハケ	ナデ 鋸目剥離	淡紫(2.5 Y 8/4)	淡紫(2.5 Y 8/4)				3mm以下の白色、黑色、赤褐色、剥離じる《報知新聞》	古墳崩れ
8	甕	口～胴部	ナデ	ナデ	棕(5YR7·6)	棕(5YR6·6)	22.2			2mm以下の白色、赤褐色、灰色剥離じる	
9	甕	底部	ナデ	ハケ	にぶい黄緑(10YR 5/3)	明黄緑(10YR7·6)			5.8	2mm以下の褐色、灰白色、黑色剥離じる	昭和41年2月繩瀬地区共和で採集
10	甕	底部	工具ナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい橙(7.5YR7/3)			5.1	3mm以下の白色、赤褐色、灰色剥離じる	底部付近内面に茶褐色の有機質物質付着
11	甕	底部	ナデ	オサエ 工具ナデ	にぶい橙(5YR6·4)	棕(5YR6·6)				2mm以下の白色、赤褐色、灰色剥離じる	

【石器】

No.	器種	部位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備考
12	打製石斧	完形	13.5	5.4	1.6	142	ホルンフェルス	





第17図 都城市立縄瀬小学校収蔵資料実測図 S=1/3

報告書抄録

ふりがな	なわぜよこおだい3いせき							
書名	縄瀬横尾第3遺跡							
副書名	都城市立縄瀬小学校屋体建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	都城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第120集							
編著者名	加賀淳一							
編集機関	都城市教育委員会							
所在地	〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町19-1 TEL 0986-23-9547 FAX 0986-23-9549							
発行年月日	2016年3月18日							
所 収 遺 跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
市町村		遺跡番号						
縄瀬横尾第3 遺跡	宮崎県 都城市 高崎町 縄瀬 1411-1	45202	TZ-N012	31° 50' 57" 付近	131° 6' 12" 付近	H26.5.1 ~ H26.5.26	48m ²	学校屋体建設
遺跡名	種別	主な時代			主な遺構	主な遺物	特記事項	
縄瀬横尾第3 遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代			竪穴建物跡 土坑	土器 石器 土製品		
要約	調査地点は、都城市立縄瀬小学校敷地内に位置している。学校屋体の新築工事に伴って破壊を受ける48m ² の発掘調査を実施した。発掘調査は御池軽石層よりも上位を対象として実施した。発掘調査の結果、弥生時代終末期～古墳時代前期にかけての竪穴建物跡2軒、土坑2基が検出され、当該期の集落遺跡であることが判明した。包含層からは土器のほか土製品、石繖、石庵丁等の石器が出土した。 旧遺跡名称「横尾地下式竪穴墓群」							

都城市文化財調査報告書第120集

なわぜよこお 縄瀬横尾第3遺跡

—都城市立縄瀬小学校屋体建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成28年3月18日

編集 宮崎県都城市教育委員会 文化財課

発行 〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町19-1
TEL(0986)23-9547 FAX(0986)23-9549

印刷 有限会社 西田文栄堂
〒885-0016 宮崎県都城市早水町9-2-1
TEL(0986)22-4418 FAX(0986)22-4428